

多摩大学における学部間連携による沖縄研究

～沖縄における観光と琉球の歴史を中心に～

A Study of Okinawa's history and hospitality with collaboration between
faculties in Tama University

共同研究メンバー

○久保田貴文*、久恒啓一*、金美德*、巴特尔*、中澤弥*、大森映子*、
安田震一**、田中孝枝**（○代表、執筆者）

1. 研究目的

学部を超えた学術領域やそれに関連する分野の課題に対して、学部独自での研究では解決が難しくても、学部間連携による研究を進めることにより解決が可能となり得る場合は存在する。そこで、本研究では学部間連携により1つのテーマに取り組むことを目標とした。具体的には、多摩大学で2学部（経営情報学部・グローバルスタディーズ学部）および大学院（経営情報学研究科）により展開されているインターゼミにおいて、沖縄の研究を対象とした。

特に、アジアダイナミズム班（以降、アジア班）が2015年のテーマとして研究した江戸時代における琉球の歴史や東アジアにおける中国・朝鮮・日本と琉球との関係およびその中で琉球が果たしてきた役割について、また、サービス・エンターテインメント班（以降、サービス班）が2015年のテーマとして研究したカジノに頼らない統合型リゾートを実現するための沖縄における観光やサービス業のあり方について、合同で研究した。アジア班は経営情報学部の教員がサービス班では主としてグローバルスタディーズ学部の教員が担当した。

本報告では、その中でも合同で実施した沖縄のフィールドワーク（FW）について述べる。

2. 研究概要

2.1 沖縄FWの概要

以下の内容で、沖縄FWを行った。

- ・日時：2015年8月16日（日）～8月18日（火）の2泊3日
- ・参加メンバー：アジア班：11人 サービス班：6人
- ・訪問場所：沖縄県那覇市・名護市他
- ・主な訪問先・訪問者：

台北駐日経済文化代表処（那覇市）蘇啓誠処長、東亜旅行社 林國源社長

* 多摩大学経営情報学部

** 多摩大学グローバルスタディーズ学部

普天間基地周辺、嘉数高台公園（宜野湾市）

辺野古周辺（名護市）

名桜大学（名護市）：住江淳司氏（付属図書館長）、伊良皆啓氏（国際学群）

琉球大学（西原町）：島袋純氏（教育学部）

沖縄タイムス社（那覇市）（上原徹常務取締役、長元朝浩論説委員）

2.2 台北駐日経済文化代表処

最初の訪問地として、台湾の領事館にあたる、「台北駐日経済文化代表処」にて、蘇啓誠処長および東亜旅行社 林國源社長から話を伺った。沖縄と台湾の関係として、現在は沖縄を訪れる外国人観光客のうち約 4 割は台湾人であること、また沖縄と台湾の接点については、農産物にも及んでいることを伺い、沖縄の観光業については、外的要因（アメリカの同時多発テロ、円高、SARS）の影響を受けやすいが、近年は美ら海水族館等の影響もあり、訪日外国人が増えつつある一方で、ホテル・バス・ガイドは不足受け入れ態勢が整っていないと解説された。



写真 1：台北駐日経済文化代表処の入口

2.3 名桜大学

次に、名護市にある名桜大学にて、付属図書館長・住江淳司教授と国際学群・伊良皆啓上級准教授からお話を伺った。住江教授からは、主に食文化と移民の話題が紹介された。食文化では、沖縄において以前はヘルシーな料理が多く県民は長寿であったが、近年は海外の食文化を取り入れすぎてしまい、一気に肥満県となってしまっていることが紹介された。また、移民については、出移民（出る側の移民、emigrant）が都道府県別で 2 位であり（1899（明治 32）年から 1941（昭和 16）年までの 43 年間の出移民数の統計、石川 [1] より）、原因としては、貧困に耐えかねて海外へ渡航したケースが最も多かったことが紹介された。

また、伊良皆上級准教授からは、沖縄の観光に関係する統計やその背景などの講義を拝聴し

た。訪日外国人観光客誘致を行うためには、観光魅力と観光資源発掘が必要なことや、その魅力として美しいビーチ、海、沖縄料理、親切で温かい人々、自然の豊かさ、マリンスポーツなど、数々の事例が紹介された。

2.4 琉球大学

琉球大学では、教育学部の島袋純教授から、戦前から戦後の沖縄や日本の立ち位置について、当時の様子を踏まえながら講義をしていただいた。講義の中では、当時の天皇陛下のメッセージとされるメモの内容が紹介された。そのメッセージの中で、米国による沖縄占領は日米双方に利し、共産主義勢力の影響を懸念する日本国民の賛同も得られるとされていた。これこそが、戦後の沖縄差別の源泉となっている、ということが紹介された。



写真 2：講義を終えた島袋教授（下段左から 4 人目）を囲んで

2.5 沖縄タイムス社

沖縄 FW の中で、最後のインタビューとなったのが、沖縄タイムス社においてである。インタビューの中では、長元朝浩専任論説委員から、当時の新聞記事などを参考に新聞記者の立場から沖縄の歴史を振り返りお話をいただいた。その中で、沖縄の人が訴える言葉は「当事者の平和のリアリズム」であり、理想主義などではないこと、また、沖縄が歴史的に抱える、日本における立ち位置がもたらした様々な事象から来る思いが、日本という国では当然の「平和」を求める思いとして表出しているものであることを伺った。



写真 3：沖縄タイムス社

3. 総括

沖縄 FW としては、2泊3日の沖縄での講義、実地調査、インタビューなどを体験し、これまでインターゼミの中で文献調査の内容を実感し、また新しい発見をすることにつながった。

また、研究全体を通して、学部間連携におけるシナジー効果として、新たな問題や課題を発見すると共に、お互いの学部を超えた人材を育成することが出来た。経営情報学部の学生に対しては、グローバルな視点にたった沖縄の歴史・観光の研究を通して、グローバルな問題を解決し、グローバルな舞台で活躍出来る人材を育成することが出来た。また、グローバルスタディーズ学部の学生に対しても、アジアダイナミズムに向き合えるグローバルビジネス人材や、観光やサービスの観点とマーケティングの感覚を見つけた人材、さらには、沖縄の地域の抱える課題を解決出来る人材を育成することも出来た。

なお、本報告は研究の一部であり、研究全体の詳細については、2015年のアジア班、サービス班のインターゼミ論文（[2]、[3]）を参照されたい。

参考文献

- [1] 石川友紀、ルーツとしての沖縄～南北移民を中心に～、
URL： <http://www.wub.gr.jp/japanese/con06/01.html>（参照：2016年9月30日）
- [2] インターゼミ（2015年度）アジアダイナミズム班 最終論文「琉球国と東アジア交流」
URL: http://www.tama.ac.jp/guide/inter_seminar/2015/asia.pdf（参照：2016年9月30日）
- [3] インターゼミ（2015年度）サービス・エンターテインメント班 最終論文「訪日リピーターに日本の魅力を発信し 日本通を育てるための SNS の利活用」
URL： http://www.tama.ac.jp/guide/inter_seminar/2015/service.pdf（参照：2016年9月30日）